

大学生の「職業適性」を高めるインターンシップ －自らが選択した就業先の体験を通して－

藤 渕 明 宏

九州女子短期大学子ども健康学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2011年5月6日受付、2011年7月1日受理)

要 約

本研究の目的は、学生自身にインターンシップ体験先を開拓させて体験させた実践効果を見ようとした。学生の多くは、自ら就業したい職種・企業等を希望したわけではない。学生たちは、現在在籍している学科とはかかわりのない興味・関心のある企業等を体験し、自分に何らかのプラスになるようにと臨んでいった。これは自己学習的な態度であるということができる。

インターンシップ事後に各学生の意識調査から、①互いの人間関係を重視しようとする協調性が育った。②職業適性を高めたという、大きく2つの分析結果を見出した。これらは、本インターンシップの目的でもあった。加えて、今回の分析から、学生たちの「大学への理解」が増したともいえそうである。これは、今学んでいる大学への回帰でもあろう。

1. 背 景

国際化及び産業構造の変化に伴い、企業においては能力主義の徹底など雇用環境が急速に変化しつつあり、求められる人材についても大きく変化してきている。

大学等においては、産業界のニーズに応える人材育成の観点から、創造性を持つ人材の育成を目指した教育の強化を行っている。その一環として、産学連携による人材育成を目指したインターンシップに取り組む大学が増加している。

今日の中学校、高等学校では卒業と同時に就職する生徒は少ない。専門系高等学校の職業中心の学科を除けば、高等学校の就職希望者の数は、中学校以下ともいえるかもしれない。このようなこともあり、保護者や教員の関心も大学等の進学に重きを置きがちである。進学する者も、最終的には就職へとつながるので、職業に焦点を当てた進路指導を学校全体として取り組んでいく必要があると考える。そう考えると、一般的にいわれる進路指導とは、究極的には紛れもなく職業指導である。

したがって大学進学においては、大学卒業後の職業選択に極めて影響があるため、多くは職業に焦点を当てて選択することになる。そうでない場合でも、大学における進路指導は避けて通れず、その者の職業適性というものがかわってくる。

本大学においては、ある程度の進路の範囲を絞って学んでいる学生が多いと思われる。そ

の進路の範囲にはそれぞれの学生の職業適性に適合した進路を求めようとしているということになる。しかしその職業適性を各学生が有しているとは限らない。

職業適性(vocational aptitude)は、ひとつの職業活動を効果的に遂行するのに必要な個人の特殊な能力、知識、態度、性格、体力、技能などの心身の特性であって、個人の職業選択ならびに職業決定の重要な要因である⁴⁾。

本大学においても、インターンシップ・プログラム(以下「インターンシップ」という)を、①自分の適正業種が何かを検証する。②就職後に社会にスムーズに対応するための準備をする。などのために設けている。年度当初3回ほど講義を受けた後、本大学と契約した企業に派遣されて2週間ほど無給で働く。アルバイトとは異なって決して良い条件ではないが、この体験を通して大きな収穫を得ることを期待している。

2. 研究方法

本研究の目的は、大学側ができるだけ体験先を与えず、学生自身にインターンシップ体験先を開拓・体験させて、その実践効果を見ようとした。すべての学生は、自ら就業したい職種・企業等への希望をしたわけではない。今在籍している学科とはかかわりのない興味・関心のある企業等を体験することによって、何らかのインターンシップのプラスになるようにと臨んでいった。何らかの企業研修をすることによって、自己研修するという、自己学習的な態度であるということができる。

よって、本研究では、自主的・自発的にインターンシップに臨んだ学生が、事後にどのような成果をあげ、成長したかを検証したい。

インターンシップ先を決める際に、大学側担当が用意したのは、大学の附属図書館1、附属幼稚園2、書店1のみであったが、表2-1のように、学生26名(構成は表2-1-1)は様々な体験先を探してきた。そこで、表2-1の16か所それぞれに学生自ら企業との連絡調整を図らせていった。

実施時期はまちまちであったが、多くの学生は、自らそれぞれの企業と調整して、夏季休業中の平成22年8月～9月にかけて行うようにして、時間は原則として1日8時間、合計最低10日間で80時間以上になるように組ませて行った。

表2-1 学生が選択した職種

職 種	人 数
A 図書館司書	6
B 図書館司書	1
C 図書館司書	1
A 幼稚園教諭	2
B 幼稚園教諭	2
C 幼稚園教諭	1
保育園保育士	1
A 書店店員	3
B 書店店員	1
C 書店店員	1
ホテル客室係	2
美容室理容師	1
飲食店店員	1
ペット店店員	1
飾り物店店員	1
会社事務店員	1
合 計	26

表2-1-1 参加学生の構成

大学名	学 年	人 数
九州女子大学	3	17
	2	7
九州女子短期大学	1	2
合 計		26

3. 研究の目的

本研究では、学生が将来を想定した職場・企業ではなく、学びの一つとして自らが選択したインターンシップが、学生にどのような教育効果があるのかを調査・分析し、本大学の今後のインターンシップ・プログラム実施に生かすことを目指す。

4. 調査方法

インターンシップ終了後、学生26名全員が平成22年10月7日に後掲資料1のように45項目各4選択肢（例 1 高まった 2 やや高まった 3 あまり高まらなかった 4 高まらなかった）によるアンケートを行った。

また、全学生から、「学生による評価」「研修日誌」を提出させ、その分析も行った。

5. データの分析方法

本研究においては、以下のそれぞれの特性を生かすようデータ処理の行い、それらの結果を末尾において重ねることによって、総合的に分析・考察を進めた。

それらは①単純集計 ②クロス分析 ③因子分析 ④数量化Ⅲ類である。

6. 各データ分析の分析・考察

(1) 単純集計

各設問は4選択肢であったが、2選択にデータを変換し、図6-1のように降順でソーティングした。その結果、45項目のうち25項目が80%以上であった。30%に達しないのは、「数理処理能力」「進路変更意志」「外国人とのコミュニケーション」「外国語運用能力」の4項目であった（詳細は後掲資料1参照）。

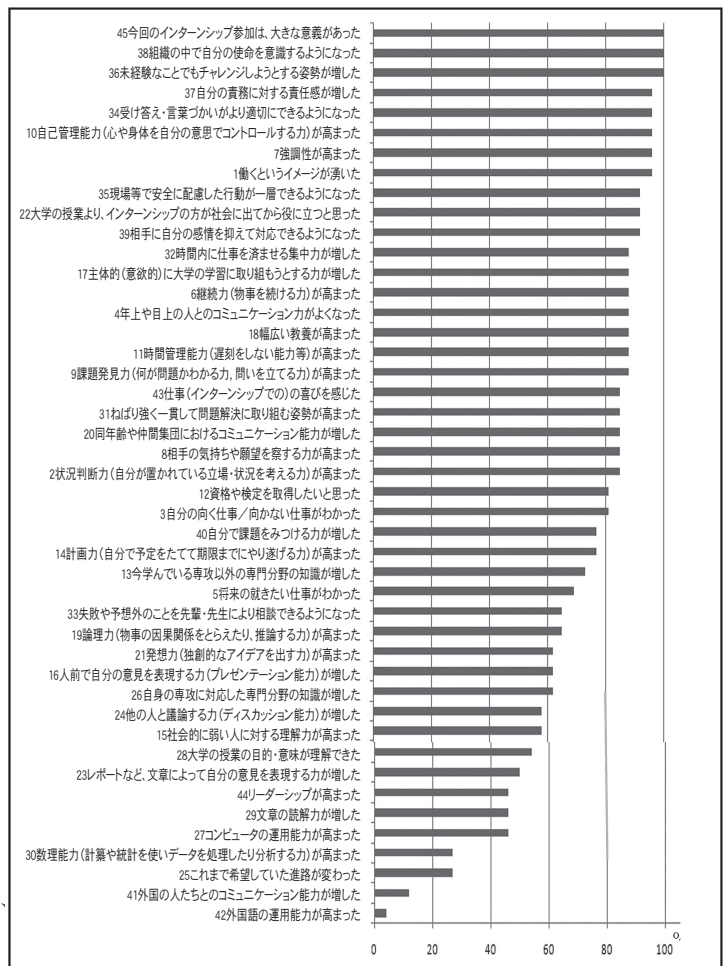


図6-1 ソートした単純集計グラフ

このように、大部分の項目が高い数値になった。これは、これらの多くの項目設定の参考とした平成22年の河野志穂¹⁾の結果を上回る。例えば、「協調性」に関する項目では、本研究では、15ポイントほど高い。

その理由の一つに、河野の各項目の語尾が「～が身についた」「～の能力が身についた」といった結果的な行動表現になっていたのを、本研究では、それらを「～が増した」「～が高まった」「～ようになった」と、判断基準を柔軟にしたことにもあるようだ。

しかし、他者と比較するまでもなく、絶対評価的に、多くの項目の数値から今回のインターンシップ・プログラムの教育効果を感じている。このことは後のインターンシップ体験の学生一人ひとりの感想・評価からもうかがえる。

(2) クロス分析

全項目45の相互の関係をみるためにクロス分析を行った。その中でカイ二乗検定をすすめ、990個 $((45 \times 45 - 45) / 2)$ の有意確率を求めた。

図6-2は、各項目の有意確率の合計の高い順に縦横の並べ替えを行った結果の一部の表である。全結果表は後掲資料2にある。

この図から、「コミュニケーション能力」「目上関係」「安全配慮」「協調性」「感情抑制」「相手理解」等の「協調性」に関する項目がまとまっていることがわかる。これらの相互の関係が協調性と強くかかわっていると見えそうである。学生にとってインターンシップ体験は、こうした協調性の高まりを強く感じ取ったことであろうといえそうである。

なお、この「協調性」に関するグループに対して、図6-2から「14 計画力」「11 時間管理能力」「21 発想力」などが、強くかかわっている様子が見える。

クロス分析 カイ二乗検定 全項目P値順位整理表			順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
順位	項目番号	項目(要約)	項目番号	20	4	35	7	39	8	23	2	43	22	31	16	14	11	21	5	6	36	38
		●: 1% 水準で有意(両側) ○: 5% 水準で有意(両側) +: 10% 水準で有意(両側)																				
1	20.20	同年齢や仲間集団におけるコミュニケーション能力が増した	20	コミュニケーション能力	○	●	●	●	●	○	●	○	○	+	○	+	○	○	○	○	○	○
2	4.4	年上や目上の人のコミュニケーション力がよくなった	4	目上関係	○	○	○	○	●	+	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3	35.35	現場等で安全に配慮した行動が一層できるようになった	35	安全配慮	●	○	○	○	●	+	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
4	7.7	協調性が高まった	7	協調性	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
5	39.39	相手に自分の感情を抑えて対応できるようになった	39	感情抑制	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
6	8.8	相手の気持ちや願望を察する力が高まった	8	相手理解	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
7	23.23	レポートなど、文章によって自分の意見を表現する力が増した	23	文章表現	○	+	○	○	○	+	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
8	2.2	状況判断力(自分が置かれている立場・状況を考える力)が高まった	2	状況判断	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
9	43.43	仕事(インターンシップでの)の喜びを感じた	43	イン喜び	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
10	22.22	大学の授業より、インターンシップの方が社会に出てから役に立つと思った	22	イン有効	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
11	31.31	ねばり強く一貫して問題解決に取り組む姿勢が高まった	31	問題解決	+	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
12	16.16	人前で自分の意見を表現する力(プレゼンテーション能力)が増した	16	意見表現	○	+	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
13	14.14	計画力(自分で予定を立てて期限までやり遂げる力)が高まった	14	計画力	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
14	11.11	時間管理能力(遅刻をしない能力等)が高まった	11	時間管理能力	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
15	21.21	発想力(独創的なアイデアを出す力)が高まった	21	発想力	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
16	5.5	将来の就きたい仕事が見つかった	5	将来希望	+	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
17	6.6	継続力(物事を続ける力)が高まった	6	継続力	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
18	36.36	未経験なことでもチャレンジしようとする姿勢が増した	36	挑戦意志	+	+	+	+	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
19	38.38	組織の中で自分の使命を意識するようになった	38	自己使命	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

図6-2 P値でソートしたクロス分析表(一部) (全図: 後掲資料2)

(3) 因子分析

先述の(2)では、「協調性」というグループが見えたようであるが、どのような因子が存在するかを見出すために、ケース数は26と少ないが項目数45の因子分析を始めようとした。

まず、後掲資料3のように、天井・床効果を示す14個の項目(1、3、6、11、12、32、35、36、37、38、40、41、42、45)を除き、共通性の推定をSMC、回転はプロマックス法で因子分析を行った。図6-3のスクリープロットにおいて第4因子と第5因子の間で大きく変化していること、また第5因子の固有値が1を下回ることから因子数4と設定し、表6-1を出力させた。

第1因子は、「リーダーシップ」「論理力」「発想力」「進路変更」「弱者理解」などにおいて、弱者を理解しつつ、論理力・発想力を高め、人をリードしていく職業人として相応しい力と判断し「職業適性能力」と名付けた。

第2因子は、「計画力」「相談姿勢」「ディスカッション」「大学生の主体性」等の因子から「進路開拓能力」とした。

第3因子は、以上2つの下支えとなると思われる心理的な側面の「協調性」「コミュニケーション」「感情抑制」といった協調性に関するまとまりから「協調性」とした。

第4因子は、「大学目的」「読解力」「専門外知識」の高まりから、今学んでいる場の理解、つまり「大学アイデンティティ」と命名した。学生のこれからの人間づくり、職業選択もこの大学での学びが基盤であり、最も大切な因子でもあろう。またそうありがたい。

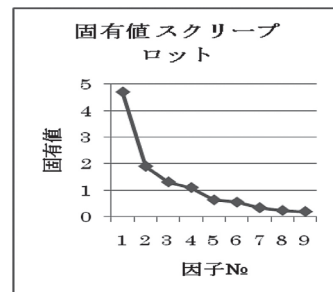


図6-3 スクリープロット

因子負荷量: 回転後(プロマックス法)					
項 目 名	因子No. 1	因子No. 2	因子No. 3	因子No. 4	共有値
第1因子 (α=0.838)					
44.リーダーシップが高まった	0.806	-0.229	-0.115	-0.091	0.498
19.論理力(物事の因果関係をとらえたり、推論する力)が高まった	0.797	0.025	0.109	-0.056	0.682
21.発想力(独創的なアイデアを出す力)が高まった	0.756	-0.006	0.173	0.078	0.743
25.これまで希望していた進路が変わった	0.621	0.100	-0.005	0.142	0.535
15.社会的に弱い人に対する理解力が高まった	0.438	0.200	-0.179	0.311	0.463
第2因子 (α=0.737)					
14.計画力(自分で予定をたてて期限までにやり遂げる力)が高まった	0.057	0.724	-0.070	-0.122	0.508
33.失敗や予想外のことを先輩・先生により相談できるようになった	-0.043	0.617	0.206	0.097	0.518
18.幅広い教養が高まった	-0.012	0.568	0.144	-0.077	0.377
24.他の人と議論する力(ディスカッション能力)が増した	0.010	0.512	0.033	0.223	0.374
13.今学んでいる専攻以外の専門分野の知識が増した	-0.181	0.488	-0.136	0.069	0.201
17.主体的(意欲的に)大学の学習に取り組もうとする力が増した	0.248	0.471	0.153	-0.055	0.441
第3因子 (α=0.777)					
7.協調性が高まった	-0.044	-0.115	1.105	-0.010	1.121
20.同年齢や仲間集団におけるコミュニケーション能力が増した	0.143	0.041	0.628	0.018	0.502
39.相手に自分の感情を抑えて対応できるようになった	-0.099	0.326	0.529	-0.088	0.436
第4因子 (α=0.706)					
28.大学の授業の目的・意味が理解できた	-0.047	-0.123	0.092	0.913	0.813
29.文章の読解力が増した	0.052	0.017	0.038	0.734	0.592
26.自身の専攻に対応した専門分野の知識が増した	0.026	0.083	-0.164	0.458	0.227
Eigenvalues	4.716	1.904	1.311	1.100	
Contribution ratio(%)	27.74%	11.20%	7.71%	6.47%	
Cumulative contribution(%)	27.74%	38.94%	46.65%	53.12%	

表6-1 因子分析表

これら4因子の関係をさらに明確にイメージ化するために図式化を試みた。図6-4のように各因子が包含されながら階層的になっているようである。このように見たとき、大学理解が高まるほど、大学での学びが高まり、更なる進路開拓の力になっていくものといえよう。それをイメージ化していると考えるがいかがであろうか。

表6-2 因子名

	因 子 名
第 1 因子	職業適性能力
第 2 因子	進路開拓能力
第 3 因子	協調性
第 4 因子	大学アイデンティティ

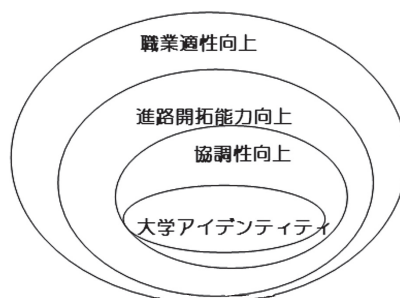


図6-4 因子の構造

(4) 数量化Ⅲ類

類似的な傾向やケース同士を集め、潜在的な因子を見出すことを試みるために、後掲資料3から更に基準を厳しくして、天井効果3.97以上、床効果1.04以下の6個の項目（4、8、22、30、34、43）を外して絞った項目数25で数量化Ⅲ類を行った。

表6-3のように固有値、相関係数ともに低いが、後掲資料4「カテゴリー数量」を元に図6-5のように2軸を交差させての図化を試みた。

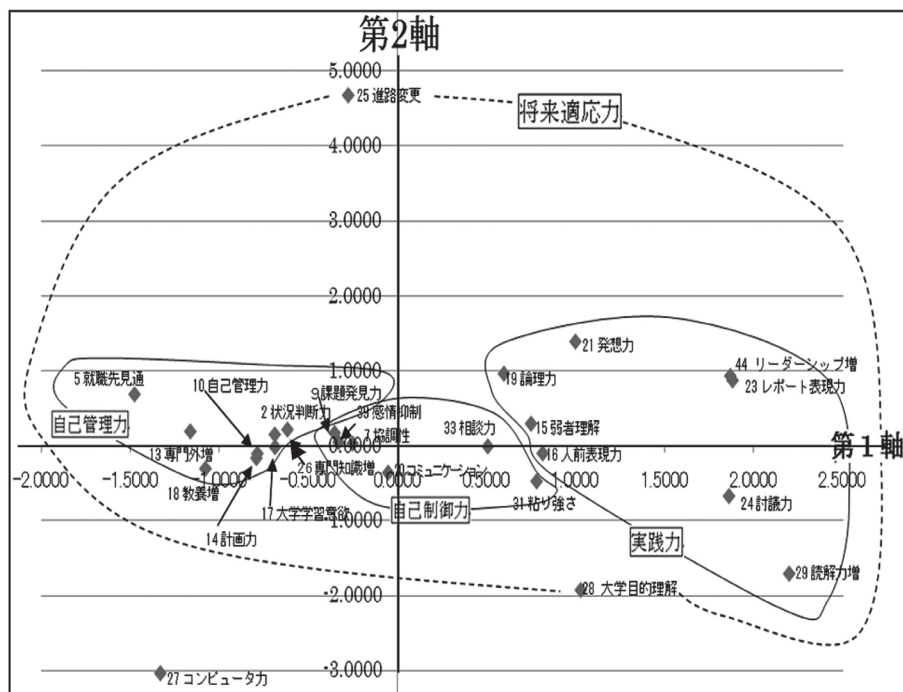


图6-5 1·2軸交差図

図6-5において、項目間のまとまりに目を付けると、3つのグループを見出した。その項目の内容から、それぞれを「自己管理力」「自己制御力」「実践力」とネーミングした。

表6-3 数量化Ⅲ類基礎データ

軸	固有値	寄与率	累積寄与率	相関係数
第1軸	0.0702	16.12%	16.12%	0.2649
第2軸	0.0642	14.74%	30.86%	0.2533

そこで、横軸の第1軸において、3つグループが「自己管理力」<「自己制御力」<「実践力」と並んでいる。そのことから学生たちが職場での他との調整を図りつつ、自己管理の力を高めながら実践力を高めるという一連の流れを意味しているととらえ、「職場適応力」と名付けた。

縦軸の第2軸は、項目に目を付けると、コンピュータ力<討議力<相談力<論理力<発想力<進路変更と進路を開拓していく力が並んでいると解釈し「進路開拓能力」とした。

よって、第1軸「職場適応力」、第2軸「進路開拓能力」の2つの軸は、進路を開拓し、その職場に適応していくといういわば職業適性能力の2大要素ととらえ、図6-5のようにそれらを大きく包んで「将来適応力」と名付けた。

7. 総合的分析・考察

6において(1)～(4)とそれぞれのデータ分析を行ったが、以上をまとめてみよう。

(1)の単純集計では、多くの項目で高い数値を示していた。とくに今回の「インターンシップは有効である」「インターンシップに意義を感じた」とインターンシップを高く評価している。それらが他の項目にも表れていると解釈した。

(2)のクロス分析は、そのソートした図6-2(後掲資料2)の感情抑制の項目などから、職業人として感情を抑制し協調性を強く求めようとする意志・態度を見ることができたように思う。

(3)の因子分析において、それらの情意面・態度面等での精神的な面も含めてどのような因子が存在するかをみたとき、協調性の向上から始まり、職業適性へと向かって学生が成長した姿が見えた。

また、学生が大学教育を見直して、大学での学びを大切にしようとする態度・意志がうかがえた。このことから学生が今回のインターンシップにおいて、大学へのアイデンティティを強く感じて、大学の価値を見直すなど大学へ回帰している面も見えるようである。

(4)の数量化Ⅲ類の1軸と2軸の交差図からも、自己制御・管理しつつ職業への実践力を高めようとしている流れがしっかりと表れ、将来への職業・社会への適応力を高めようとする学生一人ひとりの意識・態度を見ることができたように思う。

以上の(1)～(4)を総合的にまとめることができそうである。それは因子分析で因子の抽出から図6-4の関係をみていたが、その図には互いの人間関係を重視する協調性が根幹にあり、

進路適性へと本インターンシップが目指した方向へとなっているように感じる。その中で、調査項目には「大学の目的を理解した」もあったが、今回の分析から、「大学への理解」が増したともいえそうである。これは、今学んでいる大学への回帰でもある。図7-1ではそれら意味するところを破線で示して見たがいかがであろうか。

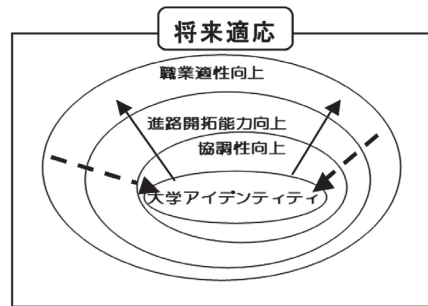


図7-1 将来適応力

なお、先述したように、「学生による評価」で各学生がごとごとく図7-2のように感想を述べている。それらは、感想文の一節で「学んだことから、大学生活を見直し、前へ進みたい」「将来の仕事に役立てたい。」そして、「この実践を多くの学生に受けてもらいたい」といっている。これらからも本インターンシップは「将来の適応力」つまり学生一人ひとりの「職業適性」を高めたといえるであろう。

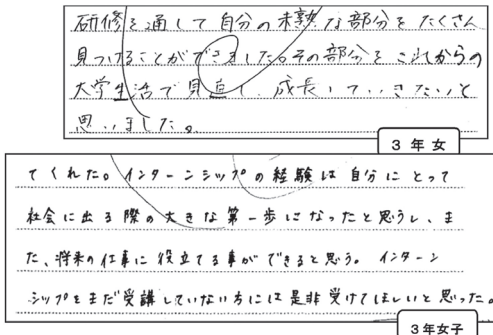


図7-2 学生の感想文の一部

8. おわりに

今回のインターンシップは、準備不足のまま実践した。その中で、不行き届きな面が多いにもかかわらず実践を

受けていただいた16の企業の方々には深甚なるお礼を申し上げたい。参加した学生がごとごとく絶大な評価、特に企業側に熱い気持ちを抱いて終了している。その事は、この研究報告の隅々に表れている。感謝の念で一杯である。

なお、本研究は、事前・事後の比較、他者との比較、また参加学生の過去の経験・将来の希望職種等を交えた調査設計を行うべきであった。平成23年度以降の実践において取り上げ、研究を少しでも厚くしたい。

<参考文献>

- 1) 河野志穂「文系大学生のインターンシップが大学での学びに与える効果」『日本インターンシップ学会第11回大会発表要旨収録』 pp.17-18 2010
- 2) 小塩真司「SPSSとAmosによる心理・調査データ分析」pp.106-150 東京図書2004
- 3) 文部科学省高等教育局専門教育課編「インターンシップの導入と運用のための手引き」pp.1-31 2009
- 4) 武衛孝雄「職業適性の発達について」島根女子短期大学紀要第15号 pp.29-34 1977

〈資料1〉インターンシップ・プログラム調査 全項目と4選択肢を2選択肢変換表

1+2：肯定的 3+4：否定的

項 目	1+2	3+4
36未経験なことでもチャレンジしようとする姿勢が増した	100	0
38組織の中で自分の使命を意識するようになった	100	0
45今回のインターンシップ参加は、大きな意義があった	100	0
1 働くというイメージが湧いた	96	4
7 協調性が高まった	96	4
10自己管理能力（心や身体を自分の意思でコントロールする力）が高まった	96	4
34受け答え・言葉づかいがより適切にできるようになった	96	4
37自分の責務に対する責任感が増した	96	4
39相手に自分の感情を抑えて対応できるようになった	92	8
22大学の授業より、インターンシップの方が社会に出てから役に立つと思った	92	8
35現場等で安全に配慮した行動が一層できるようになった	92	8
9 課題発見力（何が問題かわかる力、問いを立てる力）が高まった	88	12
11時間管理能力（遅刻をしない能力等）が高まった	88	12
18幅広い教養が高まった	88	12
4 年上や目上の人とのコミュニケーション力がよくなった	88	12
6 継続力（物事を続ける力）が高まった	88	12
17主体的（意欲的）に大学の学習に取り組もうとする力が増した	88	12
32時間内に仕事を済ませる集中力が増した	88	12
2 状況判断力（自分が置かれている立場・状況を考える力）が高まった	85	15
8 相手の気持ちや願望を察する力が高まった	85	15
20同年齢や仲間集団におけるコミュニケーション能力が増した	85	15
31ねばり強く一貫して問題解決に取り組む姿勢が高まった	85	15
43仕事（インターンシップでの）の喜びを感じた	85	15
3 自分の向く仕事/向かない仕事 that わかった	81	19
12資格や検定を取得したいと思った	81	19
14計画力（自分で予定をたてて期限までにやり遂げる力）が高まった	77	23
40自分で課題をみつける力が増した	77	23
13今学んでいる専攻以外の専門分野の知識が増した	73	27
5 将来の就きたい仕事 that わかった	69	31
19論理力（物事の因果関係をとらえたり、推論する力）が高まった	65	35
33失敗や予想外のことを先輩・先生により相談できるようになった	65	35
26自身の専攻に対応した専門分野の知識が増した	62	38
16人前で自分の意見を表現する力（プレゼンテーション能力）が増した	62	38
21発想力（独創的なアイデアを出す力）が高まった	62	38
15社会的に弱い人に対する理解力が高まった	58	42
24他の人と議論する力（ディスカッション能力）が増した	58	42
28大学の授業の目的・意味が理解できた	54	46
23レポートなど、文章によって自分の意見を表現する力が増した	50	50
27コンピュータの運用能力が高まった	46	54
29文章の読解力が増した	46	54
44リーダーシップが高まった	46	54
25これまで希望していた進路が変わった	27	73
30数理能力（計算や統計を使い、データを処理したり分析する力）が高まった	27	73
41外国の人たちとのコミュニケーション能力が増した	12	88
42外国語の運用能力が高まった	4	96

〈資料2〉全項目クロス分析カイ二乗検定(両側)結果一覧

●：1%水準 ○：5%水準 +：10%水準

[illegible]

〈資料3〉天井効果・床効果表

項 目	M	SD	M-SD	M+SD	削除項目
1働くイメージが湧いた	1.54	0.58	0.96	2.12	1
2状況判断力(自分が置かれている立場・状況を考える力)が高まった	1.88	0.65	1.23	2.54	2
3自分の向く仕事/向かない仕事があった	1.73	0.78	0.95	2.51	3
4年上や目上の人とのコミュニケーション力がよかった	1.69	0.68	1.01	2.37	4
5将来の就きたい仕事があった	2.12	0.91	1.21	3.02	5
6継続力(物事を続ける力)が高まった	1.65	0.69	0.96	2.34	6
7協調性が高まった	1.65	0.56	1.09	2.22	7
8相手の気持ちや願望を察する力が高まった	1.81	0.80	1.01	2.61	8
9課題発見力(何が問題かわかる力、問いを立てる力)が高まった	1.85	0.61	1.23	2.46	9
10自己管理能力(心や身体を自分の意思でコントロールする力)が高まった	1.65	0.56	1.09	2.22	10
11時間管理能力(遅刻をしない能力等)が高まった	1.46	0.71	0.76	2.17	11
12資格や検定を取得したいと思った	1.73	0.78	0.95	2.51	12
13今学んでいる専攻以外の専門分野の知識が増した	1.92	0.80	1.13	2.72	13
14計画力(自分で予定を立てて期限までにやり遂げる力)が高まった	2.04	0.66	1.38	2.70	14
15社会的に弱い人に対する理解力が高まった	2.35	0.85	1.50	3.19	15
16人前で自分の意見を表現する力(プレゼンテーション能力)が増した	2.31	0.93	1.38	3.24	16
17主体的(意欲的)に大学の学習に取り組もうとする力が増した	1.96	0.53	1.43	2.49	17
18幅広い教養が高まった	1.73	0.67	1.06	2.40	18
19論理力(物事の因果関係をとらえたり、推論する力)が高まった	2.15	0.73	1.42	2.89	19
20同年齢や仲間集団におけるコミュニケーション能力が増した	1.85	0.78	1.06	2.63	20
21発想力(独創的なアイデアを出す力)が高まった	2.15	0.88	1.27	3.03	21
22大学の授業より、インターンシップの方が社会に出てから役に立つと思った	1.65	0.63	1.03	2.28	22
23レポートなど、文章によって自分の意見を表現する力が増した	2.42	0.86	1.57	3.28	23
24他の人と議論する力(ディスカッション能力)が増した	2.27	0.92	1.35	3.19	24
25これまで希望していた進路が変わった	2.92	0.80	2.13	3.72	25
26自身の専攻に対応した専門分野の知識が増した	2.08	1.02	1.06	3.09	26
27コンピュータの運用能力が高まった	2.62	0.85	1.76	3.47	27
28大学の授業の目的・意味が理解できた	2.38	0.85	1.53	3.24	28
29文章の読解力が増した	2.62	0.75	1.86	3.37	29
30数理解能力(計算や統計を使いデータを処理したり分析する力)が高まった	3.08	0.89	2.19	3.97	30
31ねばり強く一貫して問題解決に取り組む姿勢が高まった	1.88	0.77	1.12	2.65	31
32時間内に仕事を済ませる集中力が増した	1.65	0.69	0.96	2.34	32
33失敗や予想外のことを先輩・先生により相談できるようになった	2.12	0.77	1.35	2.88	33
34受け答え・言葉づかいがより適切にできるようになった	1.62	0.57	1.04	2.19	34
35現場等で安全に配慮した行動が一層できるようになった	1.62	0.64	0.98	2.25	35
36未経験なことでもチャレンジしようとする姿勢が増した	1.46	0.51	0.95	1.97	36
37自分の責務に対する責任感が増した	1.46	0.58	0.88	2.04	37
38組織の中で自分の使命を意識するようになった	1.42	0.50	0.92	1.93	38
39相手に自分の感情を抑えて対応できるようになった	1.69	0.62	1.07	2.31	39
40自分で課題をみつける力が増した	1.77	0.82	0.95	2.58	40
41外国の人たちとのコミュニケーション能力が増した	3.50	0.91	2.59	4.41	41
42外国語の運用能力が高まった	3.65	0.56	3.09	4.22	42
42.43 仕事(インターンシップでの)の喜びを感じた	1.73	0.72	1.01	2.46	43
44リーダーシップが高まった	2.50	0.91	1.59	3.41	44
45今回のインターンシップ参加は、大きな意義があった	1.19	0.40	0.79	1.59	45

〈資料4〉数量化Ⅲ類カテゴリー数量一覧表

カテゴリー	第1軸	第2軸
29.文章の読解力が増した	2.1988	-1.7066
23.レポートなど、文章によって自分の意見を表現する力が増した	1.8805	0.8743
44.リーダーシップが高まった	1.8679	0.9328
24.他の人と議論する力(ディスカッション能力)が増した	1.8606	-0.6705
28.大学の授業の目的・意味が理解できた	1.0280	-1.9248
21.発想力(独創的なアイデアを出す力)が高まった	0.9982	1.3917
16.人前で自分の意見を表現する力(プレゼンテーション能力)が増した	0.8143	-0.0998
31.ねばり強く一貫して問題解決に取り組む姿勢が高まった	0.7802	-0.4733
15.社会的に弱い人に対する理解力が高まった	0.7488	0.2956
19.論理力(物事の因果関係をとらえたり、推論する力)が高まった	0.5967	0.9632
33.失敗や予想外のことを先輩・先生により相談できるようになった	0.5062	-0.0066
20.同年齢や仲間集団におけるコミュニケーション能力が増した	-0.0538	-0.3585
7.協調性が高まった	-0.2539	0.0311
25.これまで希望していた進路が変わった	-0.2779	4.6806
39.相手に自分の感情を抑えて対応できるようになった	-0.3325	0.0497
9.課題発見力(何が問題かわかる力、問いを立てる力)が高まった	-0.3546	0.1724
26.自身の専攻に対応した専門分野の知識が増した	-0.6193	0.2173
17.主体的(意欲的)に大学の学習に取り組もうとする力が増した	-0.6890	-0.0169
2.状況判断力(自分が置かれている立場・状況を考える力)が高まった	-0.6905	0.1515
10.自己管理能力(心や身体を自分の意思でコントロールする力)が高まった	-0.7883	-0.1038
14.計画力(自分で予定をたてて期限までにやり遂げる力)が高まった	-0.7934	-0.1643
18.幅広い教養が高まった	-1.0797	-0.3050
13.今学んでいる専攻以外の専門分野の知識が増した	-1.1647	0.1933
27.コンピュータの運用能力が高まった	-1.3329	-3.0347
5.将来の就きたい仕事があった	-1.4781	0.6876

Internship Program to Raise “the Vocational Aptitude” of the University Student : Through an Experience of the Operation that Oneself Chose

Akihiro FUJIBUCHI

Department of Elementary Education, Kyushu Women's Junior College
1-1jiyugaoka Yahatanishi-ku, Kitakyushu-Shi Fukuoka 807-8586 Japan

Abstract

The purpose of this study let student oneself find the internship program experience and examined the practice effect. Many students did not hope for the type of job / the company which wanted to begin work. The students experienced the internship program such as the companies where there was interest. By it, there were them for the purpose of making it some kind of pluses to oneself. The subject that it was registered now was operation without the relation. It may be said that this is a manner of the self-learning.

I carried out the consciousness investigation of the student after the end of the internship program. As a result, the students made sense of cooperation the first. The students made their vocational aptitude the second. These two results were purposes of this internship program. To the third, the students seem to have understood significance of the learning in the university from this findings more. Will this be “recurrence to the university” of students?

Key word : Internship Program, Questionary Survey, Vocational Aptitude, Self-learning, Sense of Cooperation,